遺稿（再録）

私と「考古学」

（故）賀川光夫

本原稿は別府大学名誉教授・賀川光夫先生が存命中、津久見市史談会の年次総会の席で記念講演（平成十年度）したものを、同会（酒井博会長会員一六三名）とご遺族のご了解を戴いたうえで再録したものです。

なお、原題は「邪馬台国はいつから存在したか―後漢鏡より検証する―」ですが、本誌では、その講演の前半のみを再録し、課題も『私と考古学』に改め一部加筆（註記）させて戴きました。

また、後半の内容（邪馬台国）については、後年別題で取り上げる予定です。併せてご了承願います。先生の業績を偲びながら―

編集部

私は終戦直後に佐伯に住んでおり、大分へ行くのによく津久見を通りましたが、その頃とは石灰石の山も随分変わりました。一九八〇年ごろ「中国科学院古脊椎動物と古人類研究所」（北京）の呉汝康先生と仲良くなり、「北京原人」について教えを戴きました。

かって津久見の石灰石の山の中から古い動物の骨がたくさん出てきており、これを調べてみると化石動物で、ひょっとしてこれに伴う人骨が出たら、※北京原人のように日本では一番古いんではないか、と思ったものです。その頃、津久見から大分大学に通っておられました富来隆先生と知り合い、先生が集めた石灰石の山の亀裂（きれつ）出土の動物の骨を見ると血が湧くような思いがしました。そのようなことを考えて、何回も当地の山を歩いた楽しい思い出があります。（中略）

「考古学」がやりたくて

前置きはそれくらいにして、戦後日本史の研究は自由になりました。私の専攻は「考古学」です。考古学は英語で「アーケオロジー」と言いまして、古い辞書で見ると古物学と訳してあります。これは骨董（こっとう）屋さんの親戚み

たいな学問でしたので、こういう学問をやる学生はあまりいませんでした。もちろん、戦前の話です。

私が大学に入りましたのはこの頃で、当時都下の大学で考古学を専攻するところは少なく、東京大学の人類学教室だけでした。そこに山内清男という先生がいらして、その先生のもとに夜になると都下の大学で考古学を専攻する学生が七、八くらい集まる程度だったと思います。

私がなぜ日本大学の文学部を選んだかというと、そこに東大の人類学教室におられた八幡一郎先生が非常勤として講義をされており、これが大学で唯一の講義だったのです。ですから、その先生を頼って門を叩いたわけです。私の実家は農業ですから、最初は北海道大学の農学部を狙わされたんですが、どうしても考古学をやりたくて八幡先生に師事したわけです。まあ、戦前の考古学というのはそのくらいだったんです。

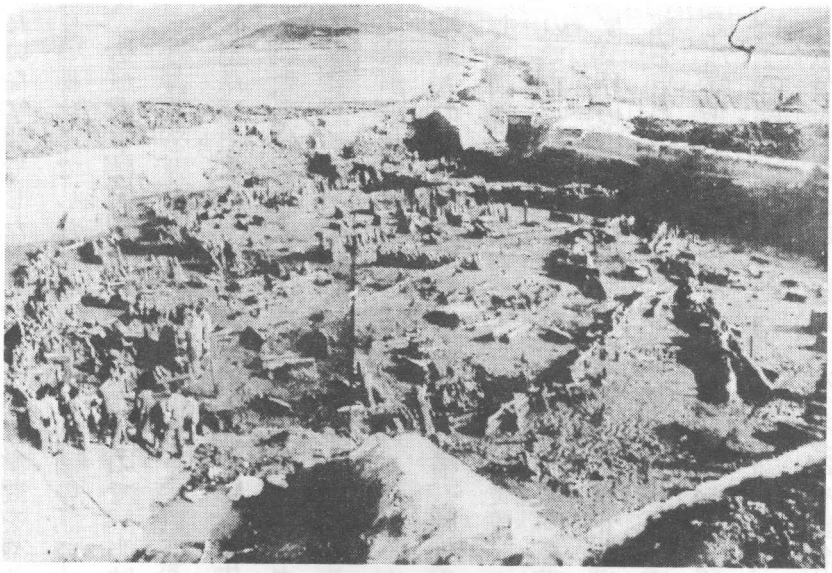
私が大学のとき、紀元二六〇〇年を記念して『日本文化史大観』という書物を文部省で編纂することになり、都下の大学で歴史を勉強している中の数人が集められました。当時、本を作るには「検閲」制度があり、陸海軍の検査官に原稿を持って行く仕事がありました。髭(ひげ)をはやした軍人に原稿を渡し、それを読んでいる間、よそ見をすると大きな声で叱られました。これが嫌いだったのでしょうか、文部省の役人は学生を集めてこの仕事をやらせたのです。この仕事を選んでくれた先生は「この仕事を続ければ卒業後は文部省に籍が出来るので、やめずにやりなさい」と言われたのですが、私は昭和十八年「学徒出陣」で出征することになりました。

このときの明治神宮外苑グランドでの壮行会のニュース映画はよく放映されます。入隊したのは土浦海軍航空隊、ついで静岡県の大井航空隊で偵察の訓練を受けた。そのとき、爆弾投下訓練の目標が登呂※遺跡の上に造られた軍需工場です。ですから、偶然のことですが、私は戦後一番初めに大きな再発掘の場所となった登呂(とろ)遺跡の俯(ふ)瞰図(かんず)の写真をたくさん撮影しました。

二十歳代で県の文化財委員に

そんなことがありまして、考古学をやっているのは非常に珍しいというので、大分県の知事さんからお呼びがあり、昔からあった史跡名勝天然記念物調査委員会を復活するので手伝ってほしいと要請され、二十歳代の後半

で大分県の文化財専門審議会の委員に任命されました。今年七五歳になり、規程により辞めることになりました。五〇年間、大分県で文化財の仕事をしましたが、思えばあっという間でした。



▲華中の河姆渡（かぼと）遺跡発掘現場を望む
（国東町歴史体験学習館 提供1998年）

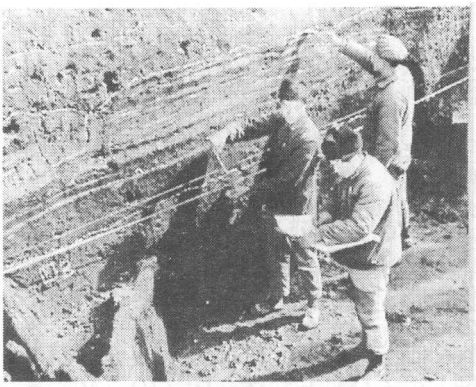
現在は県の教育委員会に文化課ができており、専門の考古学者が二〇人近くいます。また各市町村にも、臼杵市の四名を含めて県全体で七〇人を超す考古学者がいます。当時は私が一人ですから、その頃のことを思い出すと本当に感無量です。そしてその間、情報量も物凄く増え、開発も随分行われていますから、開発に伴う遺跡の調査も全国では一万件を超し毎日やっています。

そんな状況で考古学も随分変わりました。一方、遺跡の保有もイベントに変わってしまうこともあって、大変心配しているのです。おらが村にこんなすごいものがあるというと、それがお祭りというか何というか、見世物の材料になる。その草分けが佐賀県の吉野ヶ里遺跡だったのです。

間違った情報も入っていると思います。〈赤米〉などは、我が国の古代米ではないのです。このあやまちを、もう修復することはできなくなりました。秋になるときれいな赤い穂が出る赤米は、今盛んに栽培されています。だがこの米は、弥生時代の米でないことははっきりしている。中国の宋の時代に二毛作が必要になり、南方から「チャンパ米」を揚子江の流域に植えて見事に二毛作を

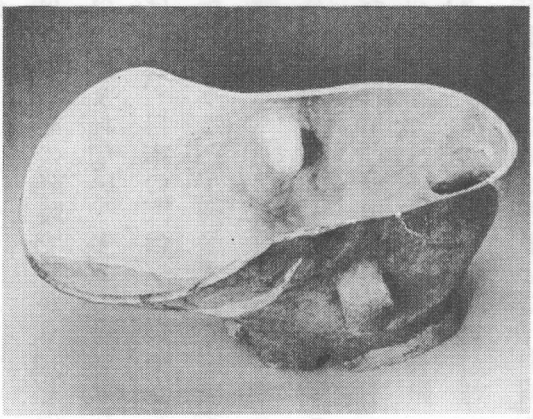
成功させたという、これが〈赤米〉といわれている。我が国に入ってきたのは、恐らく鎌倉末か室町の初めということになりましょう。

情報が増えると、正しい情報、間違った情報、さまざまです。現在、古い建物を方々で建てています。私は、今年五月五日から中国杭州の近く、河姆渡遺跡※から建築材がたくさん出土して遺跡の修復をしているというので、見に行って帰ってきたばかりです。これは、国東の安国寺遺跡の修理をする参考にしたいので現地を見てきたわけです。遺跡の修復というのは大変にむつかしいですね。皆さんの中にもお読みになった方があると思いますが、高名な亀井勝一郎先生（一九〇七～六六、文芸評論家）が『大和古寺巡礼』という本をお書きになった。その中で「文化遺跡は亡ぶままに放っておいたほうがよいのか、それとも修復したほうがいいのか絶えず迷っている」という趣旨のことを書いています。（写真参照）



▲河姆渡遺跡での発掘作業

▲炊事用具で煮炊き用陶釜



▲炊事用具の陶灯（とうしゃ）

臼杵の石仏修復をする

私が臼杵の石仏を初めて拝見したのは戦後、昭和二十二年でした。仏さんだか石だか分からないくらい、惨憺（さんたん）たる状態でした。その頃、満洲映画株式会社に勤めていた中野さんという方が、大分合同新聞社のカメラマンと

して大分で勤務しておりました。どういうわけか臼杵石仏の撮影をしていて、文化映画を作りたいからその原稿を書いてくれ、と言うのです。

その映像を見ますと、崖にあるのは仏なのか石の残骸なのか分からない。私は迷った末に「美の哀史」という題をつけ、石仏の頭が落ちて無くなった石にも仏の命と美しさがあるという「滅びの美学」を説きました。その映画が文部省で推薦映画になり、びっくりしました。その後、臼杵の磨崖仏の修理に三七年間たずさわり、一九九三年に完成しました。（稿末の写真参照）

その時、臼杵市民の方々から、あの大日如来の仏頭は落ちていたのを見慣れているんだから、あれだけは元のままにしておいて欲しい、という陳情がありました。市民の中でも、完全な修復をするかしないか、賛否両論があったのです。文化庁を含めて修復に当たった人たちがひそかに議論をしまして、臼杵の市民がやるなと言ったらここで断念する。また、委員の一人でも反対があったら、その方法はとらないという結論を出しました。

最終的には市民の合意ができて仏頭を上げたんですが、本当に遺跡の修復というのはむつかしい。今も、私はそのことで悩んでいます。修復した方がいいか、滅ぶままにしておいた方がよいのか、判断は大変むつかしい。何故かというと、完璧に修復するということは不可能だからです。臼杵の石仏の樹脂の注入ということも、実験なんですから完璧は期せられない。だとすると、そのままにしておくのが一番いい。しかし、これは滅ぶがままにまかせることなので、どうやって文化遺跡の修復を正しくやったらいいか、が課題になってきます。だから、「保存の方法があるから保存しなさい」というのも、実は問題があるのですね。

古代遺跡というのは人の歩みの経験ですから、その経験なしには新しいものは生まれない、失ってはいけない財産なのです。例えば戦後、日本の国は一体いつから国家として成立したのかということが議論されています。これについての傍証資料は、一に考古学にかかっています。『日本書記』や『古事記』などで古代国家を考えようとすると、それだけでは無理が出てくるのです。

中国の歴史は古い

中国には、史書があることに気づきました。中国とい

う国は不思議なことに、古代国家が成立すると同時にその国の歴史をきちっと収録した史書があるのです。これを二四史とか二五史とか言いますが、「史記」と呼ばれる書物が一番初めのものです。

また、これら歴史書の外に故事・古典がありますが、その中で一番古いものは「山海経」でしょうか。この書物はあまりにも古くて、いつ出来たものか分からない。

この書物を見ると西王母という神が出てきますが、この神は不老長寿の仙術を持っています。秦の始皇帝がこの薬をさがそうとしたのは、おそらく西王母の故事にならったのでしょう。この神様は崑崙山脈の中に住み、不老長寿の果樹園を作っていた。そして病気の治る薬をたくさん作った。この畑に姮娥（女神）がひそかに入り、果実を一つ食べた。それを西王母に見つかり、叱られて逃げますが月に閉じ込められたという説話があります。日本では子供の頃、月の中で兎が餅をついていると教えられましたが、中国では姮娥という女神がいて、同じような内容ですね。

初めて敦煌に行く

私が初めて敦煌に参りましたのは一九八〇年、文化大革命がすんで間もなくの頃です。ここの壁画は仏教の壁画だとばかり思っていた。ところが西王母が空を飛ぶ駕車に乗り、鳳凰という鳥に引かせて宇宙を旅行している絵が描いてあるのです。敦煌は不思議なことに中国の神話や歴史、そして釈迦生涯の物語など東西の文化・歴史・宗教がすべて描かれていて、「世界最大最古の美術館」といってもいいと思います。

私は始めて見たときは驚きました。西王母・東王父の話、そんな物語が収録されているのが故事・古典なのです。こんなのは日本にはあまり無い。ですから、中国の故事・古典を見ていると楽しくなります。例えば伯牙という琴の名人が泰山の山中で琴の修行をしている。それを鐘子期という人が熱心に聞いていた。そのために伯牙は琴を一生懸命に弾くんですが、鐘子期が突然亡くなった。すると伯牙は私の琴を理解してくれる人はもういない、というので琴の弦を切ってしまう。これが「伯牙断琴」といって、この物語が「淮南子」という書物の中に書いてあります。これは漢の時代に作られた本なんですが、中国の歴史を調べると面白い故事が他にたくさん出

できますね。

—以下省略—

【註記—編集部】

※北京（ぺきん）原人

北京の南西地（周口店）で発見された化石人類。最新世中期に生存、現世人類に比べて眉上部の発達が著しく、下アゴも歯牙も原始的。北支事変のとき（昭和十三年）日本軍が持ち去ったと伝えられ、現物は今もって不明、とされる。

※登呂（とろ）遺跡

静岡市南部にある弥生時代の遺跡。昭和十八（一九四三）年に発見。住居址・水田址および多種の出土品により、当時の農村集落の実態を示すものとして有名。

※吉野ヶ里遺跡

佐賀県神崎郡三田川町吉野ヶ里と神崎町にまたがる、旧石器時代から中世に至る複合遺跡。昭和六十一（一九八六）年から発掘、同六十四年に弥生時代の大規模な環壕集落跡や墳丘墓などを発見し、全国に有名になった。

※河姆渡（かぼと）遺跡

中国の南東部、杭州湾南岸にある新石器時代初期、紀元前五〇〇〇～三三〇〇年の遺跡。豚や水牛を飼い、水稲耕作が華南で古くから行われていたこと、その年代が華北の畑作農耕に匹敵するものであることを示した。

※臼杵石仏

県民に親しまれている臼杵石仏は、臼杵市深田・中尾・前田にまたがる崖の石仏群。大日如来や釈迦三尊像・地蔵十王像など七五体余りの諸像が現存し、藤原・鎌倉期の作とされる。

※史　記

中国の二四史の一つ、黄帝から前漢の武帝までを記した紀伝体の歴史書。全巻で一三〇巻。

※秦（しん）の始皇帝

秦は中国の国名、春秋戦国時代（紀元前七七二～同四八一年）の大国。前七七一年、初めて諸侯に列せられ、秦王政（始皇帝）に至って周など六国を滅して天下を統一した（前二二一年）。築いた「万里の長城」は有名。この長城は、東は河北省山海関から甘粛省に至る二千四百キロもある。戦国時代から造り始め、始皇帝のときに大造築してほぼ完成した。

※鳳凰（ほうおう）

古代中国で鱗（りん）・亀・竜とともに「四瑞」として尊ばれた想像上の瑞鳥。形は前面が「鱗」、首は「蛇」、背は「亀」、後身は「鹿」、尾は「魚」、嘴は「鶏」の形をしている。聖徳の天子の兆しとして現われるといわれ、鳳は雄（おす）、凰は雌（めす）

という。日本では、神社のご神幸の御輿（みこし）の上に取りつけられているのが、これである。

※西王母（せいおうぼ）

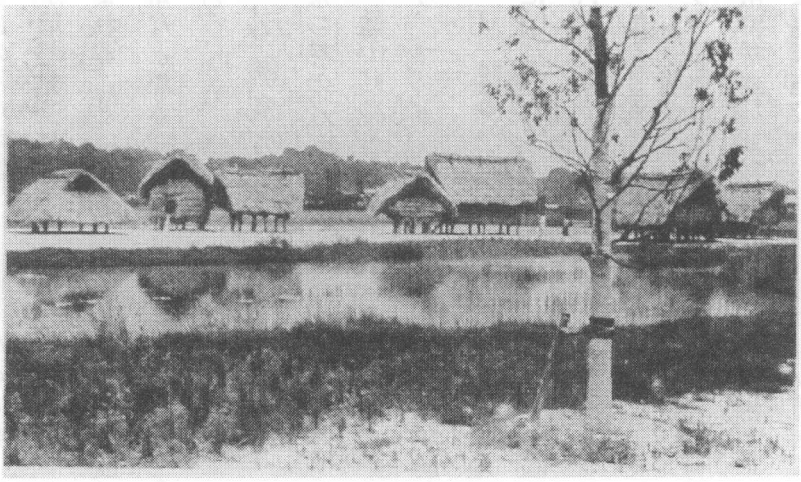
中国で古く信仰された女の仙人。姓は楊、名は回周の国王が西に巡狩して崑崙（こんろん）に遊び、西王母に会い、帰るのを忘れたという。また、漢の武帝が長生を願っていた際には、西王母が天上から降り、仙桃の実七つを与えたという神話もある。

（『歴史辞典』ほか）

▲国宝臼杵磨崖仏（四群59体）

古園石仏大日如来像に代表される臼杵磨崖仏は、平安時代後期から鎌倉時代にかけて彫像されたと言われる。

その規模と、数量において、また彫刻の質の高さにおいて、わが国を代表する石仏群であり、平成７年６月15日には磨崖仏では全国初、彫刻としても九州初の国宝に指定された。



▲高床式住居を復元した安国寺遺跡公園